TIEPh
Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy
TOYO UNIVERSITY
Newsletter No. 07 2009. 1

TIEPh 最終年度の活動に向けて

東洋大学「エコ・フィロソフィ」
学際研究イニシアティブ（TIEPh）
竹村　牧男

「東洋大学では、サステイナビリティ学連携研究機構（IR3S）の協力機関として、「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ（Transdciplinary Initiative for Eco-Philosophy. TIEPh）を立ち上げ、平成１８年度より活動してきた。３年目の年度末に際し、これまでの活動を簡単にまとめ、またこのプロジェクトの最終年度になる来年度に向けての展望を簡単に記しておきたい。

サステイナビリティ学連携研究機構（IR3S）では、サステイナビリティ学の主要な研究対象として、地球システム・社会システム・人間システムの三者間の相互作用をあげ、これら三つのシステムおよびその相互関係に破綻をもたらしつつあるメカニズムを解明し、持続可能性という観点から各システムを再構築し、相互関係を修復する方策とビジョンの提示をめざしている。このことをふまえて、諸学の課題と関係を簡略に示すと、次のように考えられると思う。

①科学・技術の進展による解決（省エネ・無公害技術等の開発。地球システム）
②社会システムの変換による解決（循環型社会への移行。社会システム）
③ライフスタイルの転換による解決（人間の生活の見直し。人間システム）
④人間観・世界観の確立による解決（生きる意味の自覚。文化システム）

TIEPh は、①自然観探求ユニット、②価値意識調査ユニット、③環境デザインユニットの３つの研究ユニット体制のもとに研究活動を進めてきたが、その内容は、主として上の④に関わるものといえよう。

この３年間（平成１８年度～２０年度）の活動実績をごく簡略にまとめてみると、次のようである。

①公開国際シンポジウムの開催
②茨城大学 ICAS と共催の国際セミナーの開催　第１ユニット
③アジア各国住民の価値意識調査の実施　第２ユニット
④諸学会との合同のワークショップ等の開催　第２ユニット・第３ユニット
⑤IR3S 傘下の各機関哲学研究者等に呼びかけ、哲学セミナーを開催
⑥世界的哲学者へのインタビュー記録作成　第３ユニット
⑦『エコ・フィロソフィ研究』を毎年度末に刊行　研究成果を論文等にて収録

⑧学部に研究成果還元科目の開設（４キャンパス同時双方向的インターネット授業）
⑨IR3S ないし連携各機関のワークショップ等への参加
⑩３ユニット協同の全体ワークショップを年２回開催
⑪ニュースレターの刊行・ウエブサイトの運営
⑫IR3S『サステナ』誌への寄稿
⑬学内評価委員会による評価（学外学識者に依頼）

特に⑤の哲学セミナーは、のちの報告にあるように、「サステイナビリティ学における哲学の役割」をあらためて考察しようとしたもので、今後に期待される。

TIEPh の来年度・最終年度の課題として、まず３つのユニットの連携を深めつつ、各ユニットの成果を統合的に表現していくことが大切である。同時に、IR3S 傘下各機関の哲学関係者等との連携をいっそう緊密化して、サステイナビリティ学における哲学の役割を確認し、協働の成果を追究していくことを続けていきたい。「エコ・フィロソフィ」は、事実上、人間と自然の根本的関係の自覚、人間観・自然観に基づくライフスタイルの見直し、あるべき社会（たとえば共生）の根本理念の提示と制度設計への基盤の提供、といったあたりまでしか貢献できないのではないかと思われる。ただしこれらの知見を、実際に制度設計に結びつけ、現実社会のあり方のデザインに結びつけなければ、問題は何も解決しないであろう。その意味で、人文科学と社会科学との学際的な協働研究がぜひとも必要であると認識している。

再来年度・２０１０年度以降の体制に向けては、来年度、文科省等の外部資金の導入その他により、可能なかぎり組織の存続ないし拡充を追求していきたいと考えている。今後とも、大方のご支援、ご協力をひとえにお願いする次第である。

2008 年度、TIEPh で開催したシンポジウムやセミナー、海外調査の報告を掲載します。詳細は TIEPh ホームページ(http://tieph.toyo.ac.jp/home.html)でもご覧いただけます。

第１ユニット　　哲学セミナー報告

田中　綾乃

2008 年 12 月、IR3S との共催で「サステイナビリティ学における哲学の役割」というテーマの哲学セミナーを開催した。そもそも IR3S におけるサステイナビリティ学の構築は、超学的な学術連携研究を目指しているものであるが、その中で哲学や思想はいかなる役割を果たしえるのか、必ずしも自明ではない。そこで IR3S 傘下の哲学研究者に参加を呼びかけ、TIEPh の研究メンバーとともに、哲学の役割について討議を行った。

今回は、茨城大学 ICAS の木村競先生、北海道大学 SGP の蔵田伸雄先生に基調講演をお願いした。木村先生は、サステイナビリティ学と哲学の両者の関係性や類似性を構造的に分析し、サステイナビリティ学においても「人間とは何か」という問いに導かれていることを指摘することで、「サステイナビリティ学は哲学である」というテーゼを呈示した。蔵田先生は、サステイナビリティ学は価値に関わる学問であり、他方哲学・倫理学は価値を分析する学問であるのだから、哲学・倫理学は環境問題に関するサステイナビリティ学に対して様々な価値の対立構造を分析するという形での貢献が可能である、という提言を行った。二時間を超える講演後の全体のディスカッショでは、サステイナビリティ学の方法論の吟味・検討の役割を哲学はもとより担っているはずである、ということがあらためて認識された。と同時に、具体的で個別的な様々の環境問題に対して、哲学と社会科学との融合、連関の可能性がますます求められることも確認された。

今回の哲学セミナーを通して、IR3S 傘下の哲学者と TIEPh の研究員が連携する一歩を踏み出すことができたことはきわめて有意義なことであった。今後もこのセミナーを母胎としながら、IR3S 内だけでなく、国内外において環境問題やサステイナビリティ学を研究している哲学研究者に参加を呼びかけながら、哲学セミナーを継続・発展させていきたいと考えている。

第２ユニット　　国際シンポジウム報告

大島　尚

2008 年 11 月、東洋大学の学術協定校である米国モンタナ大学のモーリーン＆マイク・マンスフィールドセンターの後援を受け、国際シンポジウム「みんなで地球を救いたい！～環境 NGO のサステイナブル・マインド～」を開催した。

まず、アメリカ国有林保護財団副代表のメアリー・ミツォス氏が「アメリカにおける環境非営利活動の役割とその移り変わり」と題する発表を行った。ミツォス氏は、アメリカにおける森林保護の歴史の中で、環境非営利活動を組織化し、目的を明確にし、人々の参加を促してきた影響力が何であったかを解説した上で、現在行っている地域社会をベースにした森林保護の非営利活動の具体例とその目的を紹介した。また、最近になって生じている組織運営上の問題について、解決策も含めた説明を行った。

次に、世界資源研究所中国支部長のデボラ・セリグソン氏が「中国における環境 NGO の国際活動と国内活動」と題する発表を行った。セリグソン氏は、比較的最近になって登場した中国の NGO について、国際組織と国内組織の役割の違いを中心に解説した。特に、環境 NGO は近年急速に発展してきているものの、法律上の問題や組織上の問題、さらには財政的な問題をかかえていること、しかし活動範囲は確実に広がってきており、将来については楽観視してよいことなどの説明がなされた。

３番目に、東海学園大学非常勤講師の前田洋枝氏が「日本の環境 NGO における参加者のエンパワーメント」と題する発表を行った。前田氏は、「国際海岸クリーンアップ」の事例を取り上げ、その活動内容を紹介するとともに、メンバーの積極的な参加意識に影響を与える「エンパワーメント」について、有能感、連帯感、有効感という 3 つの側面から調査結果に基づいて解説した。そして、社会心理学の立場から、環境 NGO の活動の持続に必要な条件についての氏の考えが述べられた。

最後に、TIEPh 研究員の今井芳昭氏（東洋大学社会学部教授）が、環境 NGO の活動についてまとめた上で、今後多くの人々が環境配慮行動にコミットするようになるためにはどのような方策が必要と考えるかを質問し、３名のパネリストがそれぞれの立場から意見表明を行った。フロアからも積極的な質問が出され、全体として有意義な議論が展開された。

第３ユニット　　ドイツでの哲学者インタビュー報告

山口　一郎

2008 年８月、本イニシアティブの研究調査活動として、ドイツに出張し、３人の哲学者にインタビューを行った。まず、元マールブルク大学教授のペーター・ヤニッヒ氏に科学論の立場から環境問題における哲学の役割について質問をした。彼は科学の進歩を批判哲学の立場から洞察することを問題とし、そのさい環境は人間にしか存在しないこと、つまり、実体概念ではなく、関係概念である環境は、合理的な目標設定が可能な人間にとってしか存在せず、概念の規定性に無頓着な科学研究者間の厳密な概念規定による共通理解の基盤の形成に、哲学研究が大きな寄与をなしているという主張がなされた。

次に同大学講師のハルトムート・ベルツ氏に環境デザインの一環である環境教育についてインタビューを行った。彼はマールブルクの近くの村の廃屋（かつての森林管理事務所）を手に入れて、それを中高生の学生とともに環境に親和的な校舎として改築する試みを行っている（現在の環境教育センターの建物である）。この試みでは、建築家や環境技術の専門家が、学生の自発的な企画や着想をバック

アップするよう配備されていた。そのさい、どのような校舎が再生されるのかは、その土地の環境に最大限に親和的であるという目的に即して学生との共同思考によって様々に変化した。校舎の設計や実際の建築作業も学生が中心となって行うことで、それ自体が環境を学ぶ教育プロセスになっていった。この改築は、複数の企業からの大きな資金援助によってのみ可能になり、このことは、ドイツの社会全体の環境問題に対する意識の高さを窺わせるものである。この全体のプロセスから獲得したプログラムが、現在、当環境教育センターの絶えず変革されうるプログラムの土台となっている。持続可能性のなかに含まれる保存可能性、再生可能性という課題を環境デザインの一環として垣間見ることができた。

元ボッフム大学教授ベルンハルト・ヴァルデルンフェルス氏に現象学の観点から現在の環境哲学に関するインタビューを実施した。氏は、「環境（Umwelt）」の概念を的確に理解することの必要性を強調した。環境とは、具体的な生活世界において、身体を基軸に生きられている環境に他ならず、その環境を自己組織化しつつ、そのつど製作している人間の身体的存在を現象学的分析を通して解明する哲学研究の重要性が指摘された。人間の生きる環境が、単なる物理的自然でもなければ、精神による創造物でもないことは、身体性を中軸にする哲学研究を通して明らかにされ、その生きる環境は、身体の創造性を通して豊かな環境へと発展しうるとされる。

茨城大学 ICAS・東洋大学 TIEPh 共催国際セミナー

「持続可能な発展と自然　・人間
　～西洋と東洋の対話から
　　新しいエコ・フィロソフィーを求めて～」
日時：　2008 年 11 月 8 日
場所：　茨城県県南生涯学習センター多目的ホール

ICAS･TIEPh 共催の国際セミナーも 3 年目を迎えました。今年度は、「エコ・フィロソフィ」のあり方をめぐって、思想的・理論的な立場と社会的・実践的な立場から、多角的な議論がなされました。

人間再生研究会・TIEPh 共催セミナー

「より充実したリハビリテーションに向けて」
日時：2008 年 12 月 13 日
場所：東洋大学白山キャンパス 6307 教室

当日は、多数の関係者が参加し、活発な研究発表、討論が行われました。身体のリハビリテーションを通じて、人間と環境との関係のモデルを考察し、新たな環境デザインの可能性を探りました。

Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy
TIEPh
東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ

ニューズレター第 7 号
平成 21 年 1 月発行
編集　東洋大学「エコ･フィロソフィ」学際研究イニシアティブ（TIEPh）
住所：東京都文京区白山 5 丁目 28－20　6 号館 4F　60458 室
TEL：03－3945－7534
Email：ml.tieph-office@ml.toyonet.toyo.ac.jp
Homepage：http://tieph.toyo.ac.jp/